

Early change in serum leucine-rich α -2-glycoprotein predicts clinical and endoscopic response in ulcerative colitis (Leucine-rich α -2-glycoproteinの早期変化による潰瘍性大腸炎の臨床的および内視鏡的反応の予測)

Ryo Karashima, Shintaro Sagami, Yoko Yamana, Masa Maeda, Aya Hojo, Yusuke Miyatani, Masaru Nakano, Takahisa Matsuda, Toshifumi Hibi, Taku Kobayashi

雑誌名: **INTESTINAL RESEARCH** doi:10.5217/ir.2023.00135

辛島 遼(炎症性腸疾患先進治療センター)

～はじめに～

これまで潰瘍性大腸炎に対し、色々な新薬が開発されてきましたが、患者さんごとに適切な治療薬を選ぶのは困難でした。選んだ薬が効いているのか、今後効いてくるのか判断することはとても重要です。このような場面で患者さんにとって、体力的、時間的に負担のかかる検査は避け、かつ早いタイミングで治療効果を判定できる方法を考えてきました。

【研究の背景】

潰瘍性大腸炎は症状や血液検査のCRP、便検査の便中カルプロテクチン、内視鏡検査等で、患者さんの状態把握を行ってきました。しかし短時間で検査できなかったり、結果が出るまで時間がかかったり、内視鏡の様に患者さんへの体に負担になる問題点もありました。

潰瘍性大腸炎に対し新たに保険適用となったバイオマーカーであるロイシンリッチ α -2-グリコプロテイン(LRG)は血液検査で簡便にでき、患者さんへの負担も少ないことから、患者さんの状態を把握する手段として注目されています。

しかし潰瘍性大腸炎におけるLRGの治療後の短期間での変化については、これまで十分な研究がおこなわれてきませんでした。

【研究方法】

ステロイドや免疫力を抑える薬による寛解導入治療を行った潰瘍性大腸炎の患者さんを対象としました。治療開始時、1週目、8週目のLRG、CRP、便中カルプロテクチンと、8週目の患者さんの症状、および治療開始後1年以内の内視鏡所見の改善との関連を評価しました。

【結果】

治療開始後1週目に測定したLRGとCRPは8週目の潰瘍性大腸炎の患者さんの状態を予測できました。

また、治療開始後1年以内に行った内視鏡の改善については1週目に測定したLRGが最も正確に内視鏡の所見を予測できました。

【結論】

LRGは潰瘍性大腸炎の治療に対するその後の効果予測と内視鏡の改善を治療開始後1週間という早期に予測することができ患者さんの状態を把握する手段として期待できることがわかりました。

最後に、この研究にご協力いただいた先生方、スタッフの皆様、患者様に深く感謝申し上げます。この研究が多くのお客様のお役に立てれば幸いです。

(文責:辛島 遼)

